

教科書で教えられた伝染病

—昭和 20 年代の教科書を中心に—

教育博物館

西川真代

新型コロナウイルス感染拡大により、2020 年 3 月 2 日から全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等が一斉に臨時休校となった。休校中の学校現場は、児童・生徒のケアや連絡、学習支援、校内消毒作業等に追われることとなった。

社会が感染症の流行に脅かされていたのは、コロナ禍に限ったことではない。人類はこれまで、ペストや結核、スペイン風邪など数多くの感染症の脅威にもさらされてきた。終戦後の混乱期の日本では、結核による年間死亡者数が 14 万人を超える状況であった。このような時期に作られた教科書には、どの学年においても伝染病対策について掲載されていた。ここでは、昭和 20 年代の学校教育における伝染病対策について、各学年、各教科の教科書の掲載を中心に調査し、考察する。

〈キーワード〉 伝染病 教科書 予防 学校 昭和 20 年代

I はじめに

昭和 22 年の中学 3 年理科教科書『人と微生物とのたたかい』（文部省）が、感染症（当時は伝染病と表記）に関する内容を 62 ページに渡って扱っていることが分かった。さらに、昭和 20 年代に作られた小中学校の他の教科書を調べると、多くの教科で伝染病について掲載され、そのページ数にも驚くばかりであった。

その内容から当時、結核の蔓延が深刻な状況であり、小中学校で児童・生徒に正しい知識とマスクの着用など予防法を教えることがいかに重要視されていたかが分かった。掲載された教科は、小学 1 年から中学 3 年までの理科を中心に、社会、国語、家庭、保健体育、そして算数・数学にまで及んでいた。

コロナ禍の中、学校が感染症対策に向き合っている状況は、終戦後に似た面がある。しかし、コロナ禍の参考になるはずの終戦後の学校教育で、どのように伝染病対策を行っていたのかは、ほとんど明らかになっていない。

本稿では、特別展での展示内容を中心に、調査した教科書の掲載内容から読み取った終戦後の学校教育における伝染病対策について記す。

II 研究の目的

昭和 20 年代の伝染病が深刻な課題であった時期の、学校教育における伝染病対策を、当時の小中学校の教科書の掲載を中心に調査することによって明らかにする。また、本稿によって、終戦後の混乱期における伝染病に対する学校教育の取組みを、一記録として残すこともねらいとする。

III 終戦前の学校教育における伝染病対策

1 明治時代に規定された学校衛生

学校衛生の歴史は明治時代の学制にさかのぼる。1873（明治 6）年に追加された「学制二編中追加」の第

211 章には、「小学校ニ入ルノ男女ハ種痘或ハ天然痘ヲナシタルモノニ非レハ之ヲ許サス」とあり、「小学校には種痘を接種するか天然痘を完治していないと入学できない」と規定されていた。

学制に代わって 1879（明治 12）年に公布された教育令では、更に踏み込んで、「伝染病ニ罹ルモノハ学校ニ出入スルコトヲ得ス」と、伝染病にかかった場合は感染拡大を防ぐために、出席停止とするように規定された。当時においても、これらの法令に明記されるほど、伝染病予防は重要なことであった。

2 終戦前の尋常小学校・国民学校の教科書

終戦前の教科書でも、「衛生」という題で伝染病を扱った教科書は複数あった。しかし、終戦後のものに比べると、その内容は不十分なものであった。

例えば、『尋常小学理科書 第六学年児童用』（昭和 14 年 文部省）（図 1）にも衛生の項目はあったが、2 ページ余りに、病名と原因が「極めて小さい生物」であることが記されている程度であった。

1941（昭和 16）年～1945（昭和 20）年には、国民学校令により、小学校は国民学校と改められた。現在の小学 4～6 年生にあたる、初等科 4～6 年生の理科では、『初等科理科一～三』が使用された。『尋常小学理科書』に比べると、科学的事象の説明が具体的にされ、実験も扱われている。初等科 5 年生向けの『初等科理科二』では、「8 夏ノ衛生」⁽¹⁾ という単元で(1)カビ、(2)ビンヅメ、(3)石ケン作り、(4)ハヘトカが扱われていた。その中に、「マラリアトイフ病氣」⁽²⁾ という文言はあるが、「伝染病」や「結核」の文言は見当たらない。初等科 6 年生向けの『初等科理科 三』では「5 私タチノカラダ」⁽³⁾ という単元で、(1)呼吸、(2)脈、(3)ヨイタベ方、(4)ホドヨイ運動、(5)ヨイ目、(6)ヨイ耳が扱われていた。しかし、この教科書でも「病氣」⁽⁴⁾ という文言はあるが、「伝染病」や「結核」の文言は見あたらず、保健教育の概念は読み取れない。

『修身』の教科書でも「衛生」⁽⁵⁾ が扱われていたが、公益のために伝染病予防をすることを勧める記述に留まっている。

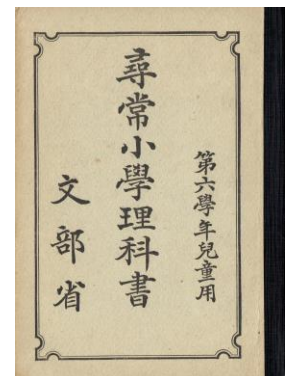


図 1 『尋常小学理科書 第六学年児童用』（昭和 14 年 文部省）

IV 昭和 20 年代の学校教育における伝染病対策

1 終戦後の学校保健の始まり

終戦後、多くの教科書で伝染病対策が掲載されるようになるが、その背景として、3 点が挙げられる。

1 点目は、1946（昭和 21）年の GHQ による「米国教育使節団報告書」である。「保健に関する教育は、初等学校では甚だしく缺如してゐるやうに見受けられる。そこでは生理の教育も、衛生の教育も実際には存在してゐない。（中略）例へば、栄養は行き當りばつたりに委されてはならず、生徒には明確な指導と實證とを要する」⁽⁶⁾ と、学校における健康教育を重視する必要があると指摘されていた。

2 点目は、1947（昭和 22）年公布の教育基本法である。この中で、「心身ともに健康な国民の育成」が教育の目的の一つとして明示された。これを受け学校教育では、本格的に児童・生徒の健康増進に力を入れ始めるようになる。

3 点目は、「学習指導要領（試案）」（昭和 22 年 文部省）の記述である。例えば、「学習指導要領 理科編（試案）」では、指導目標に「進んで伝染病のない社会の建設に向かう」⁽⁷⁾ と、伝染病に対し国や社会が取り組むべきことが述べられていた。

これらを踏まえ、教科書では、理科を中心に複数の教科、学年で、伝染病について詳しく取り上げられていった。

2 昭和 20 年代に伝染病予防を重視して作られた教科書

1947（昭和 22）年、1948（昭和 23）年の結核による年間死亡者数は 14 万人を超え、大変深刻な状況であった。そのような状況を改善するために、衛生的な生活環境づくりを重視し、伝染病予防を扱った教科書が作られたと考えられる。

(1) 理科教科書

昭和 20 年代の教科書で伝染病に関する記述を調査したところ、理科教科書に多くの掲載が見られた。伝染病予防の内容が、「からだ」という生物分野に関係すること、原因となる病原体である微生物が生態系の一つであることなどが、理科の掲載につながったと推測される。

① 文部省著作中学理科教科書『人と微生物とのたたかい』

終戦直後の教科書は、文部省の著作であった。1947（昭和 22）年発行の中学校用文部省著作理科教科書は、『私たちの科学』というシリーズ名で、分冊版 18 冊構成である。3 年間で毎年 6 冊ずつ学んだので、1 冊は約 2 か月にわたって授業に使われたことになる。

中学 3 年理科教科書の 1 冊には『人と微生物とのたたかい』（図 2）という題名が付けられ、掲載は 62 ページにも及んでいた。

その冒頭は、「昔は伝染病が発生すると恐ろしい勢いでひろがった。（中略）人々はやむをえず神に祈ったり、あやしげなまじないやきとうに頼ったりし始めるよりほか手だてがなかった」⁽⁸⁾と物語的に始まる。その後は、「人は昔から病気をなくそうと力を合わせ、少しずつ社会は進歩して来た。どのように進歩して来たかを調べる」と続く。顕微鏡による微生物の発見や、病気と病原体、個人としての予防法、さらに、社会や国家といった集団、国家間の協力についても書かれている。最後は、「私たちはこの後も微生物に関心をもって、私たちの生活をいっそう幸福なものにしたい」⁽⁹⁾と締めくくられている。

この『人と微生物とのたたかい』作成の基準となる、昭和 22 年度の「学習指導要領（試案）」には、次のように「指導目標」⁽¹⁰⁾が書かれている。

「伝染病は微生物によってひきおこされること、またこのような微生物の種類・性質・生活を知ることによって、病気の予防・治療の方法がたてられることを理解し、進んで伝染病のない社会の建設に向かう。」（第十四章 第九学年の理科指導 単元五 人と微生物とのたたかい（一）指導目標）

指導目標の「進んで伝染病のない社会の建設に向かう」という記述を踏まえた「指導方法」や「指導結果の調査」を受けて、教科書の内容が定められていた。「指導方法」では、結核等の伝染病の種類や感染経路、予防方法について話し合うことを取り扱っていた。生徒たちが、伝染病の原因・予防・治療の方法を、授業で学び理解し実生活の中で実践することで、「伝染病のない社会」の建設を目指していったのである。この『人と微生物とのたたかい』は、1954（昭和 29）年まで使用⁽¹¹⁾された。伝染病予防の内容は、1950（昭和 25）年以降に検定教科書に移行⁽¹²⁾した後も、各出版社の教科書に引き継がれ、精選されていった。

② 文部省著作小学理科教科書『小学生の科学』

同時期の小学校用文部省著作理科教科書は、単元別で『小学生の科学』というシリーズ名が付けられた。伝染病予防についての掲載内容は、児童の発達段階にに応じている。

その中で伝染病を扱ったものとして、『第 4 学年用 小学生の科学 どうしたらじょうぶなからだになれるか』（昭和 23 年 文部省）（図 3）がある。この教科書には、「いきているばいきん」⁽¹³⁾という項目があり、



図 2 『私たちの科学 17 人と微生物とのたたかい 中学校第 3 学年用』（昭和 22 年 文部省）

「1 ばいきんのすまい」⁽¹⁴⁾では、イラストを中心に、ばいきんが空気中や汚い場所、暗い場所、食べ物等に潜んでいることが書かれている。「2 ばいきんの旅行」⁽¹⁵⁾では、ばいきんを一人称とし、どのような感染経路で感染するかを挿絵で示している。



図3 『第4学年用 小学生の科学 どうしたらじょうぶなからだになれるか』(昭和23年 文部省)

また、『第6学年用 小学生の科学 からだはどのようにはたらいているか 伝せん病や寄生虫はどうしたら防げるか』(昭和24年 文部省)(図4)では、「伝せん病のしらべ」⁽¹⁶⁾で、予防接種を受けたみいちゃんが、伝染病について疑問を抱き、伝染病の名前を調べることが書かれている。そこから、「けっかく」⁽¹⁷⁾「てんねんとう」⁽¹⁸⁾「水と伝せん病」⁽¹⁹⁾「発しんチフス」⁽²⁰⁾など28ページにわたって小項目ごとに詳細に記述されている。その内容は、例えば「けっかく」の場合、ツベルクリン反応や感染経路、予防方法について詳細に書かれ、また、多くのグラフや表が用いられている。



図4 『第6学年用 小学生の科学 からだはどのようにはたらいているか 伝せん病や寄生虫はどうしたら防げるか』(昭和24年 文部省)

③ 検定教科書 啓林館『新しい理科』新版

昭和25年より、小学理科でも検定教科書が使用されるようになった⁽²¹⁾。例えば、検定教科書『あたらしいりか 新版 小がく一ねん』(昭和28年 啓林館)では、「えいせい」⁽²²⁾という項目がつくられ、『あたらしいりか 新版 小学二年』(昭和28年 啓林館)では、「冬のえいせい」⁽²³⁾という項目がつけられた。うがいや手洗い、換気、ほどよいしめり(湿度管理)など、現在の感染症予防に共通する内容が絵を中心に掲載されている。小学校の低学年から高学年に至るまで、発達段階に応じて、伝染病予防について教えられていったことが分かる。

また、『新しい理科 新版 小学六年下』(昭和27年 啓林館)において、マスクの着用⁽²⁴⁾について掲載されていたことは、特筆すべき内容である(図5)。教科書にはせきなどで空中に飛んだばい菌を吸わないためマスクの着用がよいこと、さらに、自分が風邪をひいたときには、必ずマスクをかけてばい菌をとばさな

いことを心がけるように、と書かれている⁽²⁵⁾。

現在のコロナウイルス感染予防では、マスクの着用は基本であり、ほとんどの人が率先して行っている。コロナ禍以前でも、インフルエンザ等の感染症予防のために着用している人が多かった。しかし、昭和20年代後半から児童たちは学校でマスク着用の大切さを学び、やがて家庭教育として定着していったと考えられる。現在では、学校で教えるまでもなく感染症予防の基本となっているため、教科書の掲載は見られないが、かつての学校教育が感染症予防の定着に大きく貢献したことが、この掲載からうかがえる。



図5 『新しい理科 新版 小学六年下』(昭和27年 啓林館)

(2) 算数・数学教科書

伝染病を扱った教科書の中で、特に興味深いのは、算数と数学である。現在の教科書で「正の数・負の数」といった単元が設けられているように、「私たちのからだ」⁽²⁶⁾、「結核の研究」⁽²⁷⁾、「伝染病」⁽²⁸⁾といった単元が設けられていたことは驚きであった。

① 『算数 第5学年用 上』

『算数 第5学年用 上』(昭和22年 文部省)は、小学5年生向けの算数教科書である(図6)。冒頭に「伝染病にかからないように、注意しよう」⁽²⁹⁾という先生のことばが書かれているが、単元内での伝染病の扱い方は、計算の題材という印象を受ける。

② 『中等数学 第三学年用(2)』

中学校3年向け教科書『中等数学 第三学年用(2)』(昭和22年 文部省)の「結核の研究」の単元では、11ページに渡って伝染病に関する表やグラフが掲載されている(図7)。「教師

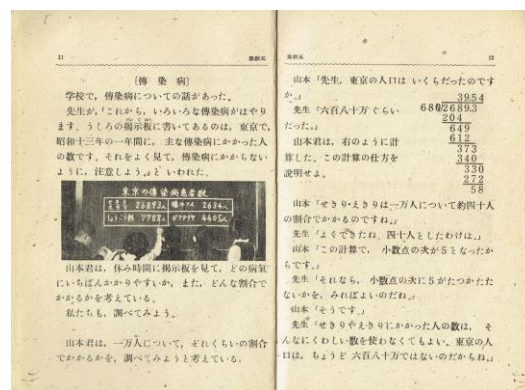


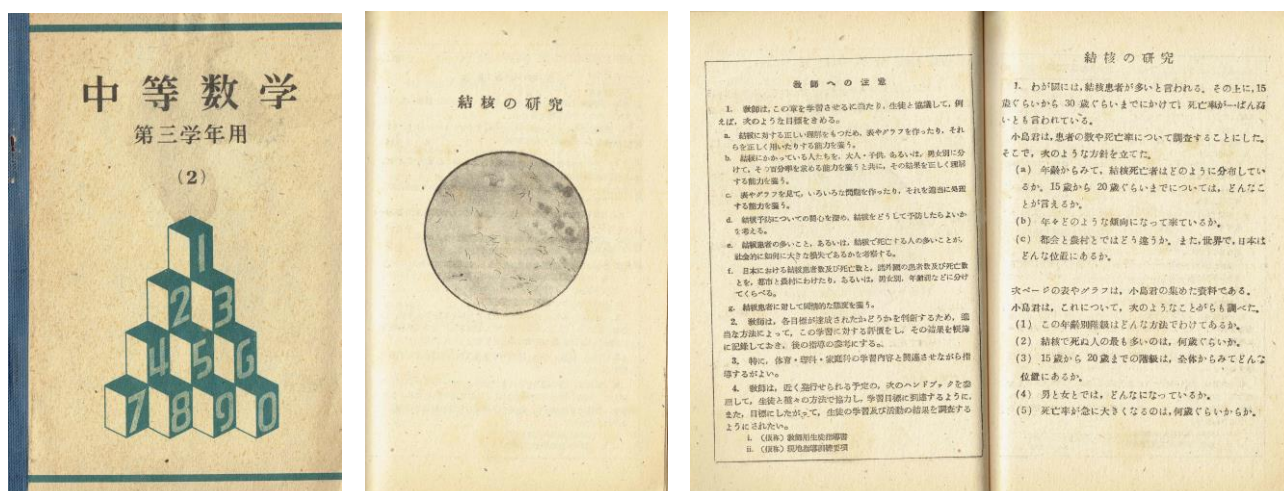
図6 『算数 第5学年用 上』
(昭和22年 文部省)

への注意」⁽³⁰⁾では、「結核に対する正しい理解をもつため、表やグラフを作ったり、それらを正しく読み取ったりする能力を養う」ことや「結核患者に対して同情的な態度を養う」ことが目標例として明記されていることに、驚かされる。数学的理解のための伝染病教材ではなく、結核を正しく理解するために数学が用いられていた。当時、中学卒業後、約半数の生徒は就職したが、結核死亡率は15歳以上で著しく上がっていた。このような状況にいた15歳を迎える中学3年生に、結核予防の正しい知識を身につけさせようとしたのだと考えられる。

さらに、「体育・理科・家庭科の学習内容と関連させながら指導するのがよい」⁽³¹⁾と教師への注意が書かれている。これは、現在の学校教育で進めようとしてされている教科横断授業を彷彿とさせる記述である。

③ 『私たちの数学 第二学年用(1)』

『私たちの数学 第二学年用(1)』(昭和24年 中等学校教科書株式会社)では、単元「私たちのからだ」で60ページにわたって健康増進や伝染病について扱っている。「この単元の学習に参考となる書物」⁽³²⁾に、『理科教科書 人と微生物とのたたかい』が挙げられている。「この書物を用いられる先生方に」⁽³³⁾と題し、編集の趣旨が書かれているページでは、「数学科は他教科と協力して、生徒の生活を指導して行くものである」と書かれているように、理科等の他教科と横断的に伝染病に関わる授業が進められていたと推測される。



1. 教師は、この章を学習させるに当たり、生徒と協議して、例えば、次のような目標をきめる。
 - a. 結核に対する正しい理解をもつため、表やグラフを作ったり、それらを正しく用いたりする能力を養う。
 - g. 結核患者に対して同情的な態度を養う。

図7 『中等数学 第三学年用(2)』(昭和22年 文部省)

(3) 他の教科書

上記の理科や数学以外でも、幅広い教科で伝染病が扱われていた。特別展で展示したものを中心に、各教科での扱いを紹介する。

① 社会科

『たろう』(昭和23年 文部省)は主人公たろうくんを中心に書かれた、小学3年生向けの社会科教科書で

ある。単元「しんたいけんさ」⁽³⁴⁾の(五)⁽³⁵⁾では、「おなかの虫、きんがん、むしば、すききらい」などの「からだをじょうぶにしていくなめには、すてておけないたいせつなもんだい」を挙げている。その上で、「しかし、たろうくんたちのように、みんながまいにちかおをあわせて、いっしょにくらしているときには、でんせん病ほど、こまる病気はないでしょう」と、集団生活の中で伝染病が最も困る病気だと書いている。伝染病予防として、予防注射、ばい菌が顔を出す隙を作らないための強い体作り、清潔な生活環境作りが挙げられている。そのために、体を丈夫にする規則を作り、守っていくことで、子どもやまちの人が丈夫になる、と締めくくられている。

『私たちの生活(二) 都会の人たち 小学校第五学年用』(昭和23年 文部省)は、小学5年生向けの社会科教科書である。単元「三 大きな病院」⁽³⁶⁾では、伝染病の中でも肺結核に注目して説明がされていた。登場人物のじゅん子さんが大学病院勤務の内科医のおじさんから聞いた話として、児童の文章形式で掲載している。印象的な内容として、「いったん肺病にかかったというと、日本では、ただその病人をけぎらいすればすむと考えるふうがある。伝染病だから、警戒することは大いに必要だ。しかしそういうふうにくわがっていながら、いっぽうではたんをどこへでもはきちらして平気でいたり、人ごみのなかへいって帰ってきても、うがいもしなかったりする。また食事のまえに手を洗わない人も多いようだ」⁽³⁷⁾と書かれている。感染者を毛嫌いして差別をしながらも、人ごみに行つてうがいをしない様子は、コロナ禍における行動と重なっているように見受けられる。その後は、ツベルクリン検査、大学病院の仕組み、公衆衛生、最後は日本の医学の発達のためにまで話が及んでいる。1冊を通して、月日と記述した児童の名前が書かれた日記のような文章形式のため、各項目の内容を自分自身の問題として捉えやすくなっている。

② 家庭科

1947(昭和22)年度の「学習指導要領(試案)」では、職業科の中に、農業・工業・商業・水産・家庭という五つの科目を設け、生徒はその中の1科目または数科目を学習することとなっていた。昭和22年度の「学習指導要領 家庭編(試案)」では、伝染病予防に関わる内容として、「2. 第七ないし第九年の目標」に、「(四) 家族の病気やけがの予防・手当のできる能力」⁽³⁸⁾とある。

『家庭 中学校第二学年用』(昭和23年 文部省)には、「十三 季節と伝染病」⁽³⁹⁾という単元が設けられている。「一年中で最も伝染病にかかりやすいのは、いつか。消化器系・呼吸器系に分けて、その理由を考えてみよう」⁽⁴⁰⁾という問いから始まる。また各伝染病の、1年間における流行期をまとめた表や、うつる経路、うつってから発病するまでの日数の一覧が図示されている。さらに、「伝染病は、その発生の条件を一つ欠くことによって、予防することができる」と、生活改善を勧めている。

一方、『家庭 中学校 第一学年用』(昭和23年 文部省)を見ると、「十 病気の予防」⁽⁴¹⁾という単元がある。結核についても取り上げられ、「各国における人口一万に対する結核死亡比較」、「十五歳から二十九歳までの者の死亡要因」、「人口万につき年齢別結核死亡数」のグラフが大きく掲載されている。学年をまたいで、段階的に伝染病予防について学習していたことがうかがえる。

② 保健体育科

『どうしたら健康が増進されるか 下』(昭和25年 日本教図)は、中学生向けの保健体育の教科書である。この教科書の「4 伝染病」⁽⁴²⁾の単元は、(1)伝染病の種類、(2)伝染病の伝染のしかた、(3)伝染病を媒介するはい、(4)蚊と病気、(5)蚊の駆除法、(6)免疫、(7)健康教育(結核対策)の構成で書かれている。物語調でもなく、表やグラフも含まれていない。伝染病の種類や原因、対策について客観的に事実を記述している。「(7)健康教育(結核対策)」⁽⁴³⁾の項目では、「健康教育が社会的に国家的に大きな貢献をすることにもなるのである」、「伝染病の予防と治療には、健康教育は欠くことのできない重要なことである」と、健康教育の重要性について繰り返して書かれている。なかでも、「健康教育で最も注意しなければならないことは、わが国の国民病といわれている結核についてである」、「実に、健康教育は、結核の撲滅に大きな力をもってい

るのである」と、項目のタイトル通り、結核に焦点をあてて書かれている。この教科書は、1949（昭和 24）年の「中等学校保健学習指導要領（試案）」にもとづいて作られている。健康教育によって伝染病に打ち勝つことを説く点は、保健という教科の特色と考えられる。

④ 国語科

終戦後に文部省が作った小学生向けの国語教科書 18 冊（1～6 年生が使用）には、伝染病に関する記述は見られなかった。一方、検定教科書においては、伝染病に関する内容を掲載したものが見られた。

例えば、『こくごの本 二年上』（昭和 27 年 二葉株式会社）の「九 よぼうちゅうしゃ」⁽⁴⁴⁾ という教材では、チフスの予防注射を受ける様子が書かれている。「ちゅうしゃはいたい」と言っていた児童たちが、先生から何のために注射をするのかを問われ、「チフスにかからないようにする」と答えている。さらに、どんな病気を問われ、チフスが感染する病気であると答え、感染すると人に迷惑をかけることを学んでいく。その後は、予防注射を受けた児童たちが、「これでチフスがにげていきますよ」と先生に言われてにこにこ笑う、という場面で締めくくられている。教材文を読む中で、予防注射の目的、チフスという伝染病の特性、予防注射の流れを学ぶことに加えて、予防注射への恐怖心を払拭できるような構成になっている。

また、昭和 30 年代の教科書になるが、『改訂 小学国語 6 年下』（昭和 31 年 大阪書籍）には、「二 ストレプトマイシンの父」⁽⁴⁵⁾ という教材がある。結核新薬ストレプトマイシンの発明により 1952（昭和 27）年度のノーベル医学賞を受賞したワクスマン博士の功績を紹介している。伝染病予防を記したものではないが、「ストレプトマイシンの発見は、結核患者に大きな光明をもたらした。この薬のおかげで、日本の結核死亡率も年々少なくなっている」と書かれている。学校の授業を通して児童に広く知らせたい発見であったとうかがえる。

V 感染症を取り上げた現在の教科書

昭和 20 年代の教科書との違いを示すために、感染症について掲載された、令和 2 年度現在、福井県で使用されている教科書も展示した。現在の教科書では、小学校の保健、中学校の保健体育において、感染症に関する内容を取り上げている。福井県の公立学校の中学生在が使用する『新中学保健体育』（平成 27 年 学研）の内容を見ると、「感染症とその予防」に 4 ページ、「性感染症とその予防／エイズ」に 4 ページ記載されている。感染症の種類や原因、予防など、科学的で正確な知識をもつための従来の記述がされている。加えて、「新たな感染症が広がりを見せた場合などには、患者やその家族への偏見や差別など、人権上の問題が起こることもあります」⁽⁴⁶⁾ と、感染症の患者に対する差別や偏見、誤解などに関することにも触れている。

VI おわりに

コロナ禍の現在、私たちは感染症対策として、マスクの着用、手洗いやうがい、換気等を自ら行っている。どれも当たり前のことのようにだが、海外では、新型コロナウイルスの感染拡大によって、ようやくマスクの着用等の重要性が認められるようになった国が数多く見られる。一方、日本で予防意識が根付いている背景として、昭和 20 年～30 年代の学校教育で伝染病について学んだことが大きな役割を果たしたと考えられる。

今回の調査に当たり、終戦後の結核による死亡者数が深刻な状況下において、学校教育が伝染病予防のために担ってきた役割について考察していった。結果として、学校教育が社会で果たしてきた役割の大きさ、価値の重要性を再認識できた。展示した教科書では、多くのページで伝染病予防について掲載し、現在では予防の文化として定着しているマスクの着用まで指導内容に組み込まれていた。終戦後、結核の死亡率は急激に下がっていくが、この要因として、結核予防法の制定、BCG 接種、治療薬の開発に加え、国を挙げた学校教育での伝染病予防の取組みが大きく貢献したと考えられる。予防医学の分野で、こうしたことは明記さ

れてこなかったが、児童・生徒の健康や命を守るために、学校教育が重要な役割を果たしてきたのである。

また、本稿を通して、調査した昭和20年代の教科書の掲載内容から読み取った、終戦後の学校教育における伝染病対策をまとめた。それによって、終戦後の学校教育の取組みを一記録として残すことができたと考ええる。2020年のコロナ禍のような非常時への対応として、今後の教科書編集等で、学校教育がどのようなことをしていけるのかの参考になると考える。

さらに、会期中に機関誌「医学図書館」の菅修一氏から取材を受け、特別展「教科書で教えられた伝染病」の展示内容が「医学図書館 Vol. 67 No. 4」^(*)の「オン・ザ・スポット」に掲載された。このことから、昭和20年代の教科書に見られる伝染病対策が、医学分野からも興味ある内容であることが分かった。この掲載によって、医学分野にも教員の貢献を広めるきっかけとしたい。

《引用文献》

- (1) 文部省 (1943) 『初等科理科 二』 翻刻 p. 52-63
- (2) 文部省 (1943) 『初等科理科 二』 翻刻 p. 63
- (3) 文部省 (1943) 『初等科理科 三』 pp. 37-55
- (4) 文部省 (1943) 『初等科理科 三』 p. 46
- (5) 文部省 『尋常小学修身書 卷六』 第22課 (明治43年～大正6年使用)、『尋常小学修身書 卷五』 第6課、第7課 (大正7年～昭和8年使用)、『尋常小学修身書 卷五』 第6課 (昭和9～15年使用)
- (6) 米国教育使節団報告書 : マックアーサー司令部公表 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1272931> (国立国会図書館デジタルコレクション) p. 23
- (7) 文部省 (1947) 「学習指導要領理科編 (試案)」
- (8) 文部省 (1947) 『人と微生物とのたたかい』 p. 2
- (9) 文部省 (1947) 『人と微生物とのたたかい』 p. 61
- (10) 文部省 (1947) 「学習指導要領理科編 (試案)」
- (11) 国立教育研究所附属教育図書館編 (1966) 『国定教科書内容索引 国定教科書内容の変遷』 広池学園出版部 p. 149
- (12) 永芳弘武、中村紀久二、加藤宗晴 共編 (1969) 『教科書検定総覧 中学校篇』 小宮山書店 pp. 147-177
- (13) 文部省 (1948) 『どうしたらじょうぶなからだになれるか』 (第四学年小学生の科学E) pp. 23-29
- (14) 文部省 (1948) 『どうしたらじょうぶなからだになれるか』 (第四学年小学生の科学E) p. 23
- (15) 文部省 (1948) 『どうしたらじょうぶなからだになれるか』 (第四学年小学生の科学E) pp. 24-25
- (16) 文部省 (1949) 『からだはどのようににはたらくか 伝せん病や寄生虫はどうしたら防げるか』 p. 37
- (17) 文部省 (1949) 『からだはどのようににはたらくか 伝せん病や寄生虫はどうしたら防げるか』 pp. 38-44
- (18) 文部省 (1949) 『からだはどのようににはたらくか 伝せん病や寄生虫はどうしたら防げるか』 pp. 45-46
- (19) 文部省 (1949) 『からだはどのようににはたらくか 伝せん病や寄生虫はどうしたら防げるか』 pp. 47-50
- (20) 文部省 (1949) 『からだはどのようににはたらくか 伝せん病や寄生虫はどうしたら防げるか』 p. 51
- (21) 永芳弘武、中村紀久二、加藤宗晴 共編 (1968) 『教科書検定総覧 小学校篇』 小宮山書店 pp. 147-175
- (22) 内藤卯三郎、松原益太、永田義夫、松本武夫 共編 (1953) 『あたらしいりか 新版 小がく一ねん』 啓林館 pp. 16-17
- (23) 内藤卯三郎、松原益太、永田義夫、松本武夫 共編 (1953) 『あたらしいりか 新版 小学二年』 啓林館 pp. 56-57
- (24) 内藤卯三郎、松原益太、永田義夫、松本武夫 共編 (1952) 『新しい理科 新版 小学六年下』 啓林館 p. 13
- (25) 内藤卯三郎、松原益太、永田義夫、松本武夫 共編 (1952) 『新しい理科 新版 小学六年下』 啓林館 p. 13
- (26) 数学学習指導研究会 (1949) 『私たちの数学 第二学年用 (2)』 中等学校教科書株式会社 pp. 165-224

- (27) 文部省 (1947) 『中等数学 第三学年用 (1)』 中等学校教科書株式会社 pp. 43-51
- (28) 文部省 (1947) 『算数 第五学年用 上』 東京書籍 pp. 11-14
- (29) 文部省 (1947) 『算数 第五学年用 上』 東京書籍 p. 11
- (30) 文部省 (1947) 『中等数学 第三学年用 (1)』 中等学校教科書株式会社 p. 44
- (31) 文部省 (1947) 『中等数学 第三学年用 (1)』 中等学校教科書株式会社 p. 44
- (32) 数学学習指導研究会 (1949) 『私たちの数学 第二学年用 (2)』 中等学校教科書株式会社 p. 224
- (33) 数学学習指導研究会 (1949) 『私たちの数学 第二学年用 (2)』 中等学校教科書株式会社 pp. 1-4
- (34) 文部省 (1948) 『たろう』 日本書籍 pp. 49-70
- (35) 文部省 (1948) 『たろう』 日本書籍 pp. 66-70
- (36) 文部省 (1948) 『私たちの生活 (二) 都会の人たち 小学校第五学年用』 日本書籍 pp. 25-32
- (37) 文部省 (1948) 『私たちの生活 (二) 都会の人たち 小学校第五学年用』 日本書籍 p. 26
- (38) 文部省 (1947) 「学習指導要領 家庭科編 (試案)」
- (39) 文部省 (1948) 『家庭 中学校 第二学年用』 東京書籍 pp. 57-60
- (40) 文部省 (1948) 『家庭 中学校 第二学年用』 東京書籍 p. 57
- (41) 文部省 (1948) 『家庭 中学校 第一学年用』 東京書籍 pp. 47-55
- (42) 保健教育研究会 (1950) 『どうしたら健康が増進されるか 下』 日本教図 pp. 83-94
- (43) 保健教育研究会 (1950) 『どうしたら健康が増進されるか 下』 日本教図 pp. 92-94
- (44) 西原慶一ほか5名 (1952) 『こくごの本 二年上』 二葉株式会社 pp. 70-79
- (45) 川端康成、針本久春、熊沢龍、高木市之助、浜田広介、平林治徳 (1956) 『改訂 小学国語 6 年下』 大阪書籍 pp. 12-20
- (46) 森昭三、佐伯年詩雄 (2016) 『新・保健体育』 学研 p. 111

注

- (※ 1) 特定非営利活動法人日本医学図書館協会 機関誌「医学図書館 Vol. 67 No. 4」(2020)
<http://plaza.umin.ac.jp/~jmla/kikanshi/index.html>